



戦争の日本近現代史

加藤陽子 著(講談社現代新書)

日本学術会議のメンバーに選ばれなかった東大教授のメジャーデビュー本です。外交文書や、交渉の書...



生きて帰ってきた男

小熊英二 著(岩波新書)

最初に言っておきますがこの著者の代表作『民主と愛国』(210/038/1)は読んでいません。あの分厚い本はな...



ゾウの時間 ネズミの時間

本川達雄 著(中公新書)

はつきり言って古い本です。どんな生物も心臓を10億回打って死ぬとか、老人の時間はなぜすぐに過ぎ...



中村屋のボース

中島岳志 著(白水社)

大阪外大に入学したこの方は、大学の授業になじめず、講義をさぼって図書館で本ばかり読んでいたそうです。そんな人が...



分解の哲学

藤原辰史 著(青土社)

り、積み木を通じて世界は部分と全体からできていることを体で学ぶという話、東京の戦後にあつたゴミ拾いで共同生活...



近代ヨーロッパの誕生

玉木俊明 著(講談社メチエ)

阪大の文学部が、高校の歴史系の教員に向けて講座を開いてくれた時にこられていたのがこの方...



中国「反日」の源流

岡本隆司 著(講談社メチエ)

本の最後の著書のプロフィール欄を見るのが好きです。若い頃は、特に何も感じなかったのですが、この歳になると自分より若い人が増えてきてゾクゾクする...



石の肺

佐伯一麦 著(新潮社)

普段滅多に小説を読まないのですが、ふと手にしたのがこの方の『山海記』でした。奈良の五條を出発し、熊野まで走る日本最長距離の路線バスで旅をしながら、自分の人生を振り返る私小説ですが、時々語られる若いころの、小説家だけでは食べられない、建設作業員として働いていた話...



黒船前夜

渡辺京二 著(洋泉社)

熊本在住のこの方は、かつて河合塾の講師をしながら著述業を並行させていました。本人曰く、歴史家ではないというものの、歴史家が光を当てない歴史に焦点を当て、掘り下げるところは、歴史家以上かもしれません。この本は、日本が開国する前に、ロシアとどのような関係だったのが、詳しく調べられています。開国をせまるため、江戸に向かっていたロシアのレザノフが長崎に長期拘留されたさい、彼専用の家が建てられ、そこで暮らし、長崎の人々とふれあつたことが生き生きと語られています。『逝きし世の面影』(210/M13/)が有名な著者ですが、『近代の呪い』、『無名の人生』などのエッセイも味わい深いです。